

知識と智慧

西川竹彦

Takehiko NISHIKAWA : Knowledge and Wisdom

(1955年12月10日受理)

『現代世界の「諸悪」(evils)が、「叡智の欠如」(the lack of intelligence)とともに、道徳的欠陥(moral defects)によるものであることは、これを率直に認めなければならぬが、しかし人類は今日まで「道徳的欠陥」を根絶する如何なる方法の発見にも成功しなかつたし、説教や訓戒によつて、せいぜい悪徳の旧い一覧表に偽善を加えて来ただけにすぎなかつた。これに反して「叡智の欠如」の方は、適当な教師さえ得られるならば、その教師に熟知されている方法によつて容易に増進しうるものである。従つて「徳」(virtue)を教えるための何等かの方法が発見されるまでは、道徳の進歩に期待するよりは、「叡智の増進」(improvement of intelligence)によつて人類の進歩は期待されるべきである。』(ラッセル)

(1)

リスナーの第1382号(The Listener, September 9, 1954. vol. LII, No. 1382.)にB.ラッセルの「知識と智慧」(Knowledge and Wisdom)と題する短い論文が掲載されているが、この論文中でラッセルが強調していることは、現代人の不幸と混乱の最も本質的な原因が、現代人の智慧の欠如にあるということである。科学哲学を標榜し、記号論理学や論理実証主義と深いつながりを持つ彼が、現代人の不幸と混乱の原因として「智慧」の欠如を強調していることが、如何にも印象的であり、我々の胸に深く迫るものを感じるのである。

彼がこの論文の中で、智慧を構成する最も重要な要素として取り上げているものは「比重の感覚」(a sense of proportion)ということである。つまり問題の何処に重点を置くべきかを、全体と部分との適正な評価から正しく判断する能力のことである。換言すれば、問題に含まれている重要要素をすべて考慮に入れた上で、その重要要素の各々に適正な比重を置く能力のことである。このような能力を別の言葉で、彼は又事物を「包括的に透察する力」(comprehensive vision)とも呼んでいる。

実際このような能力が、現代人に必要なことは、ラッセルの指摘をまづ逆もなく明白なことである。しかし実際問題として、ギリシャの昔ならいざ知らず、知識や技術が益々専門分化する趨勢にある現在、自分の専門領域に関する知識や技術の修得のみで精一杯であり、他の領域のことまでも広く透察し、そこに一定の知見を立てる余裕など我々には殆んど絶無に近いといわなければならないであろう。しかし現代人の悲劇が事実このような包括的透察力の欠如に、すなわち事物を客観的に捉え、こ

れに公正妥当な価値評価を加える能力の欠如に、その原因があるとすれば、単に至難なわざであるといつてすまされないものがあるのではあるまいか。例えば、現代人の悲劇といわれている原子力と原子爆弾の問題にしても、その端緒は原子構造の解明という純学問的な問題から出発した事柄が、何時しか全人類破滅の運命をかけた恐るべき戦争手段の発明という事態にまで発展してしまつたのであつた。このような現代最大の問題は暫くこれを除外するとしても、包括的な透察力を欠くがために現代人を懊悩せしめていると思われる問題は、これ以外にも尙無数にあるであろう。例えば、医学の発達による死亡率の低下が、他面では却つてむづかしい人口問題や食糧問題などをひき起し、全く研究者の予期せざる結果を社会に投げかけているが如き事例がそれである。一研究者にとつて、自分の専門的領域における知識の修得のみで自己のエネルギーの殆んどすべてを傾倒しなければならぬのが、科学研究者の実状だとすれば、我々がいきおい一局部のみにとらわれて、大局を透察しえず、又枝葉末節に拘泥して根幹を顧る暇がないのも、亦当然としなければならないであろう。謂わば現代の科学文明というものが、我々をして益々「山に入つて山を見ず」態の近視眼的境位に追い込みつつあるのである。

従つて知識の発達のみ信頼をおき、人類の現在と未来を楽観視することは、この上もない過誤と罪科を人類の現在と未来に残すものといわざるを得ないのである。これがラッセルをして、知恵としての包括的な透察力、すなわち事物を適正な比重において捉える力の修得を、現代人に要請せしめる所以なのではなからうか。

しかしこの事物を包括的に透察する力というものは、

上述の如く複雑多岐に亘る問題を全体と部分との関聯において考察し、その構成要素の各々を適正な比重において正しくこれを把握しようとする能力のことである。従つて事物をたゞ単に包括的に広く理解するだけでは、未だ智慧としての機能が十全に発揮されているとはいひがたいであろう。何故ならば、問題を全体と部分との関聯において考察し、その構成要素の各々にそれぞれ適正な比重をおくということには、既に一定の価値関係において事物を把握するということが含まれており、従つて予め一定の価値意識が予定されていなければならないからである。この価値意識がラッセルの指摘する、第二の要素たる「人間生活の究局的目的への一定の知見」(a certain awareness of the ends of human life) ということなのである。

つまり事物を包括的に透察するということは、たゞ単に事物を純客観的に縦及び横のつながりにおいて把えるということだけではなく、同時に「人間生活の究局的目的への一定の知見」からする価値づけが、重要な要素として加味されなければならないということになるであろう。しかも事物を広く包括的に透察するということが前述の如く知的な幅の広さを要求している如く、人間生活の究極的目的が何であるかへの一定の知見は、感情的な幅の広さを要求しているということが、ラッセルの場合にはいいうるのである。謂わば彼のいう知慧とは、知的にのみならず感情的にも、幅の広いことが要求されていると見る事が出来るのである。

彼はいう「我々がしばしば知識の点では広いが、感情の点では狭いというような人を見出すことは、決して珍しいことではない。このような人こそ、私のいうところの知慧に欠けた人物なのである。」と。そして彼はこのような知識の点では幅が広いが、感情の点では幅の狭い人物の一例として、ヘーゲルを挙げているのである。ヘーゲルの哲学史は、まことにその規模と構想の雄大さからいえば、彼のいう如く幅の広い知識の典型的なものといえよう。しかしヘーゲルが彼の哲学史において述べんとしていることは、彼が属していたドイツ国民が世界で最上の国民であり、彼の属していたドイツ民族こそ、最も選ばれた世界史の担い手であることを証せんがためのものであつた。このような感情的な偏狭さというものが、おそろしく事物のあるべき姿を歪め、適正な比重において事物を考察する場合に、いたく事物の公正妥当な取扱いをゆがめるものであることは、今更いうまでもないことであろう。

ラッセルが知慧の本質を「此処 (here) と今 (now) の暴君から出来うる限り、我々を解放することである。」といつているのも、又「我々には我々の諸感覚のエゴイズムをなかなか抑制しうるものではない。例えば、視覚聴覚、触覚の如きは何れも我々の肉体と緊密に結ばれていて、impersonal であることは頗る至難である。我々の心情として亦同じことである。というのは、それらも亦我々自身の中から始つているからである。」等々と述べているのも、我々の感覚や感情が元來 individual なもので、その点偏狭なものであることを彼が指摘したものと解することができる。しかし我々の諸感覚や諸感情が元來 individual なもので、その点偏狭なものであるとしても、この事實は決して我々の感情が、impersonal になりえないということを証するものではないであろう。

生理的肉体的諸条件のみによつて、行動を規制されている赤子の時代から、漸次年齢のすすむにつれて、このような生理的肉体的な individual な諸条件によつては左右されなくなり、次第に彼自身の視野を拓めて行くのが人間の成長というものである。我々は自分の思想や感情が完全に impersonal になることを望むべきではないし又さようなことは事実不可能であるとしても、出来得る限り思想的にも感情的にも impersonal であるべく努力することが、近視眼的な物の考え方や感じ方から解放され、無思慮な自己中心的な、或は自国民・自民族中心的な物の考え方や感じ方から救われる道ではあるまいか。彼が所謂智慧としての幅の広い透察力の中に、impersonal な知的な要素と同様に impersonal な感情的な要素をあわせ求めているのも所詮、自己中心的な或は自国民・自民族中心的な物の考え方や感じ方から、つまりそれらのもつ近視眼的にして無思慮なエゴイズムから、我々を解放せんがためではなからうか。

現代が知識の点では、前代にその比を見ない程のすばらしい発達を見せながらも、智慧の点では、その成長進歩が殆んど見られなかつたところに、現代人の不幸と混乱を救いたいものにしていようとすれば、知的に広い視野をもつと同時に感情的にも幅の広さ、換言すれば impartiality をもつということが、一個人として、一国民として、一民族として現代に処する最良の道であろうことは、彼の言をまつ迄もなく疑いえないところであろう。而して、ここで彼のいう知的な幅の広さというものが、前述の如く単に自己の専門的領域のみならず、広く他の領域にまでわたつて、複雑な事象を適確公正に、謂わば事実にもとづいて実証的にこれを把えることであつ

たとすれば、感情的な幅の広いというものも、これらの事象を個人的な狭い視野からでなく、国境と民族を超えた全人類的な全世界的な立場において、これを把え評価することを意味しているものと見るべきであろう。

(2)

しからばこのような智慧を、我々は如何にして修得すべきなのであろうか。該論文の末尾においてラッセルはこのような智慧が現代人にとって必要欠くべからざることを述べると共に、このような智慧を教えることが、本来学校教育そのものの重要な目的であることをもあわせて力説しているのである。その中で彼は、智慧を教えることが可能であるといつても、従来の道徳教育 (moral instruction) の如きものよりは遙かに知的要素をもつものであること、及びそれが知識を授ける過程において副次的に修得されるものであることを説いているのである。「憎悪や偏狭さがどんなに惨憺たる結果を招来するかは、知識を授ける過程において、これを副次的に指摘することが出来るであろう。私は知識と道徳が余りに離れ離れにあることには賛成することが出来ない。成程、専門化された知識というものには智慧と殆んど何等の関係も持つてはいないが、しかし学校教育において更により広い視野からそれらの専門的知識が「人類の諸活動の総計において」(in the total of human activities) 占める適当な位置を与えられるならば、立派に智慧としての修得に役立つであろう。よき技術家は又、同時によき市民でなければならぬ。然り、よき市民——一党派、一国家にとつてのよき市民ではなくして、全世界にとつてのよき市民たらねばならぬ。」——こう彼は語っているのである。

つまり彼のいう智慧の教授とは、何か固定した実践的認識乃至は人世智の如きものとして特別に与えられるのではなくして、知識を授ける過程において自から附随的に教えられ、修得されるものということになるであろう。過去において、多くの人々が「賢者の石」(the Philosopher's Stone) や「不老長生の薬」(the Elixir of Life) を求めて、空しくその多くの生命を犠牲にして来た如く、従来智慧を求めるといことが、ややとすると何か秘教・秘儀的な、或は難業苦行的なわざを意味するかの如く誤解されて来たのであるが、ラッセルにとつて智慧とはこのような heroic matters ではなくして、極く平俗な事柄を意味するものと受けとつてよい。例えばここに相互に激しく憎しみ合っているA氏とB氏がい

て、相互の憎しみの果てに相互に相手の死滅を願つているとしよう。A氏に「何故貴方はB氏を憎むのか」と問えば、A氏はB氏の悪徳の数々をあげて、貴方に訴えるであろう。又B氏に「何故貴方はA氏を憎むのか」と問えば、B氏はA氏の悪徳の数々をあげて、貴方に訴えるであろう。そこで今度は貴方がA氏やB氏に、相互に訴えあつている中傷的な事柄が、全くどちらも同一の事柄であることを示したとしたらどうであろう。勿論自分等の偏見によつて毒せられている彼等には、そうすることが或は一層相手に対する憎しみをかき立てるに役立つのみであるかも知れない。しかし、若し貴方が忍耐とたゆまざる説得とを続けるならば、何時かはA氏もB氏も自分達がかくも憎しみ合うのは、お互の人間弱點 (human wickedness) のしからしめることであり、このような憎しみ合いが続く限り、決して自分達にとつての幸福と平和は訪れえないものであることを信ずるようになるであろう。もしA氏とB氏がこのような信念に到達したならば、貴方は智慧を教えることに半ば成功したものとつてよいであろう。こうも亦ラッセルはいつているのである。

しかし如上の如く、彼が智慧が教えることが可能であり、又智慧を教授することが学校教育における本来的な諸目的の一つであることを説いているにしても、彼は決して現在の学校教育において、このような智慧の教授が容易になされうるとはいつてはいないのである。否、むしろ彼の現代の学校教育に対する批判からすれば、或は当然その逆のことがいえるのかも知れないのである。

何故ならば、嘗つてW・ジェームズが現代人の合理的知性にとつて、假令不条理、不合理であつても、人生にとつて有用なものは敢えてこれを真なるものとして、承認しよとする Will to believe (信ぜんとする意志) を主張したのに対して、彼は逆に科学の領域を除いては、あまりにも不合理、不確実な事柄のみが、あたかも合理的にして確実な事柄の如く横行している現状に憤慨して、Will to doubt (疑わんとする意志) を主張し、このような現状を招来せしめた原因の一つに、現代の学校教育をかぞえ上げているからである。「科学においてこそ、物は真正真銘の知識に近づきつつあるということが出来るのに、そこでは却つて人々の態度は試験的 (tentative) であり、疑惑にみちて (full of doubt) いる。…然るに政治や経済の領域では、今のところ科学の領域と反対に科学的知識に近づきつつあるものなど何一つないにもかかわらず、万人が万人平気で独断の見解をふりまわし、

飢餓・投獄・戦争といった暴力的手段に訴えることによつて、自分達と対立する意見から、自分達の意見を守ることを、当然のことだと考えているのである。」と。そして、何故にこのように政治や経済の領域において、現代のイデオロギイともいべき彼のいわゆる「不合理な確実性」(irrational certainty) が横行し、謙虚にして科学的な実証的態度 (tentative agnostic frame of mind) が影をひそめてしまつたかに就いては、彼は第一には政治的な「宣伝」工作に、第二には経済的な諸圧迫に、そして第三には国家権力の傀儡たる現代の学校教育に、その原因を求めているのである。

彼がこのように、現代人の知性を痲痺せしめつつある有力な原因の一つに、政治的宣伝工作や経済的諸圧迫と並んで現代「教育」をあげていることは、この際我々の最も関心を寄せざるをえないところであろう。

現代教育が如何に歪められ、どれ程不当なものであるかは、彼の批判をまつ迄もなく、先づ第一に現代初等教育が義務教育として、例外なくその国々の国家的統制のもとにおかれていたこと及び、そこで教育されている主たる教育目的がこれ又例外なく、自国にとつて都合のよい「よきアメリカ人」の養成であり、「よきドイツ人」「よき日本人」等々の養成であるという点にあるだろう。

いわば現代学校教育というものは、総じて自国に都合のよい国民の養成機関たることに、その主要目的を見出しているということが、各国共通に見られる現象だといつて決して過言ではないのである。そこでは真実だけが語られ、真理のみが教えられるのではなくして、自分達に都合のよい、自国民・自民族に都合のよいことが真実らしく語られ、真理らしく装われて教えられているといつてよいのである。現代の素晴らしい科学的知識の発達にも拘らず、他方においてはこのような国民的・民族的偏狭さが、あたかも真実らしく、真理らしく偽装されて氾濫せしめられつつあるということ、この事実は一体どうしたことなのであろうか。「人は自己の自叙伝を綴るにあつては、ある程度の謙虚さを示すものだが、国民が自国の自叙伝を綴るにあつては、自惚れと自負に際限がない。」全く「よきアメリカ人」「よきドイツ人」「よき日本人」の養成とは、人類全体にとつては不都合な人間の養成ということと聊かも異なるところがないであろう。そこには人類全体の幸福も平和も見出すことが出来ないばかりか、逆に人類全体にとつての不幸と破滅があるのみであろう。

これがラッセルのいう智慧としての幅の広い知識と、偏狭さのない感情とが、知識が発達すればする程益々要請されねばならぬとする所以なのである。しかも知識の発達が今後よきにつけ、悪しきにつけ、我々の人生目的の実現を益々容易ならしめうればうる程、この要請もその切実さの度合を益々倍加するものと見るべきであろう。

(3)

元來教育は自らの当然の責務として、二つの目的をもつている筈であるとラッセルはいう。その一つは自国民に最低必要の教養として「読み」・「書き」・「算術」等に関するいわゆる definite knowledge を与えることであり、もう一つはこれらの与えられた知識を土台として、自力で健全な判断を下したり、新たに独創的な見解を開陳したりする精神的習慣 (mental habit) を啓発するというのである。

学問的に素養のある国民なくしては存立しえなかつた近代国家にとつて、理論的にも、実践的にもその必要さが認められたのは、如上の教育目的のうちの前者、すなわち「読み」・「書き」・「算術」等に関する definite knowledge の方であつた。今このような明確な知識として授けられるものを information と呼ぶならば、もう一方の知識、すなわちこれ等の与えられたる知識を土台として、更に新しき独創的な見解や判断を開陳する知能の啓発による知識の方は、これを intelligence と呼ぶことが出来るであろう。而してこのような intelligence の啓発は、理論的には兎に角、実践的には近代国家によつて一応忌避されて来たと考えるのが、真実に近い見方であるといつてよい。

いや、intelligence 啓発の無視は、プラトンの「理想国家論」以来、綿々として世界の政治史を貫いて流れて来た、あの「上に立つものだけが考えるべきであつて、残余のものはただ従えよよいのだ。」とする政治的原理の近代的表現でしかなかつたともいいうるであろう。所謂「秀才」といわれ、断片的な知識の量的豊富さのみを従らに誇つた人間だけが養成されて、自らの力で思考し、自らの力で評価し、自らの力で独自の見解を開陳しようとする、独創的能力をもつた人材の養成が、いささかも顧みられなかつたのは、所詮当然の帰結であつたといふべきではなからうか。

別けても、かつての我が日本の如く愛国心の旺盛にして、偏狭な民族的優越感の強烈であつたところでは、このような偏向は特に顕著であつたといつてよい。ラッセル

ルが「日本における初等教育は instruction という点では、まことに素晴らしいものだといわれている。しかし日本の初等教育にはこの instruction に加えて、今一つの目的があつた。それは天皇崇拜を教えこむことであつた。しかも近代化される以前の日本以上に強い信条として。かくして日本の学校では、全国一斉に知識 (information) が与えられる一方、迷信が助長されるのが従来からのならわしなのであつた。」と批評しているのも、決して偽りではなく今尚我々の記憶にあらたな所である。

このようなゆがめられた教育、information のみの注入に終始して、いささかも自らの知能の活用を重んじない教育しかも偏狭な自国中心・自民族中心に終始した教育が、どんなに知的に感情的にいびつな人間をうみ出し、又こうして生み出された人間が、政治的宣伝工作や経済的圧迫などによる歪められたる世界の中で、どんなに目眩目な判断やロボットの如き行動に陥るかは、最早や想像に難くないであろう。与えられたるものだけを鵜のみにし、授けられたるものだけを盲信するだけであつて、自らの能力で思考し、自らの力で判断する精神的習慣を全然訓練されなかつた人間に、どうして現代の混乱と不安を正しく分析し、正しく把握することが出来るであろうか。又偏狭な国家主義的・民族主義的優越感に毒せられた人間に、どうして国境を越えた人類的な広場において、公正に物を考え、感ずることが出来るであろうか。

ラッセルがさきに現代人にとって、知識の修得と同時に智慧を身につけることが必要であること及び、このような智慧を身につけることが学校教育に課せられた一つの教育目的であることを説きながらも、現代の学校教育の現状に批判的であつた所以も、おそらく以上の如き学校教育の欠陥にその理由を見出すことが出来るのではなからうか。又従来より彼が終始一貫して、事実を尊重する「科学的精神」を説き、自らの力で考え、自らの力で独創する知性を喪失した現代人に、「睿智の増進」の必要を事あるごとに呼びかけて来た所以も亦、このあたりにその理由が存するのではなからうか。

事実にもとづいてのみ思考し、事実にもとづかざる如何なる知識もこれを信じまいとする逞しい実証的精神、自己中心的・自国民中心的な偏狭な感情を排して、出来る限り全人類的・全世界的視野において物事を評価しようとする感情的 impartiality、所詮この二つが、彼の現代教育に期待する大きな目標なのであろう。しかし彼の智慧が、このような科学的な実証的精神と、幅の広い感情的な寛容性に裏付けられた新しい睿智の誕生の上に

始めて獲得されうるものとすれば、私達は同じようにその世界観の科学的にして、人類的視野に立つことを誇るマルキシズムの主張を、更めてここに顧みる必要があるのではなからうか。何故ならば、前者が個人や民族の特性を承認しながらも、尚ほ出来る限り超個人的・超国家的・超民族的という意味での世界性・人類性を主張するのに対し、後者は却つて歴史的必然性を荷なうが故に、敢えて革命的階級としてのプロレタリアートの階級性を、又革命的政党としての共産党の党派性を強調するからである。一つが偏狭性という意味での感情的 partiality を排除して、公正妥当に事物を評価する世界的人類的広場を設定し、そこに人類共通の社会的価値を見出そうとするのに対して、他は却つて人類史・世界史の正しい歩みを必然的に荷なつているが故に、プロレタリアートの階級性とその革命政党としての共産党の党派性よりする評価こそ、最も公正妥当な社会的価値を荷なうものたることを主張しようとするからである。つまり、前者が科学と価値の結びつきを、現代人の事実尊重の実証的・科学的精神と、全世界的・全人類的な impartial な感情とに求めようとするのに対し、後者のマルキシズムは科学と価値の結びつきを、かえつて唯物史観にもとづく現代社会の科学的認識と、この科学的認識の実践を歴史的・必然的に荷なわざるをえないプロレタリアートの階級性、その前衛たる共産党の党派性とに求めようとするからである。

今、ラッセルのいうところの智慧の具体的な姿を、以上の如き科学と価値の結びつきに、すなわち我々現代人の共通の理想とか、共通の一般的な目的とかいう意味での価値と、現代諸科学の諸成果とを結合し、そこに出来る限り全人類的・全世界的視野に立つ社会的価値の実現を計ろうとする点にありとすれば、この彼の主張にはマルキシズムの党派性や階級性尊重の主張と、相容れざる理論的ギャップのあることを、我々はあらためて認識しなければならぬであろう。何故ならば彼の全世界的・全人類的な impartial な感情の主張が、マルキシズムの党派性や階級性尊重の思想と相容れないことは勿論であるが、彼のかかる主張はあたかもマルキシズムの理論体系が、党派性・階級性にあまねく滲透されている如く、彼の社会思想の全般にあまねく滲透しているからである。

例えばラッセルは現代の不安と混乱は、決してマルキシズムが主張するが如く、政治的な革命方式のみによつて解決されうるものとは考えてはいないようである。

彼は経済的デモクラシーという意味での社会主義の実現を理想としてもつてはいるが、このような理想の実現は現在の如き自己中心的・自国民中心的・自民族中心的な国際情勢のもとでは、到底その実現を期待しえざる儚ない希望にすぎないことを彼は信じているのである。彼は経済的デモクラシーとしての社会主義への道程として、先づ第一に現在の諸国民や諸民族が自国の主権を超越して、自国のみへの偏狭な忠誠心、すなわち国家主義的・民族主義的愛国心に代る、「新しい忠誠心」謂わば全世界への全人類への幅の広い忠誠心を獲得しなければならぬとしているのである。このような精神革命、このような人間革命が行われて後に始めて、世界国家の理想が、資源の平等な国際間の分配が、又国際間の紛争の平和的解決が可能になるとしているのである。

従つて、彼の主張するこのような社会主義への到達の道程は、政治革命方式をとるマルキシズムとは逆であるといつてよい。勿論ラッセルの主張するが如き「新しい忠誠心」(new loyalty)すなわち世界国家への忠誠心の誕生のみによつて、現代の混乱と不安が又現代資本主義国家の悩む諸矛盾がスムーズに解決されるものとはとうてい考えられないであろう。寧ろいろいろの批評はあつても、現実のソヴェート聯邦や中共の実状は、マル

キシズムの主張が「現代超克」の一方式として最も有力なものであることを如実に示しているともいいうるであろう。しかし、それにも拘らず、ラッセルの主張が冷戦の現実、何か強く我々に訴えるものをもつているのも、それ自身が又「現代の超克」の有力な一方式としての資格をもつていることを物語るものではなからうか。猜疑心と恐怖、偽瞞と謀略、虚偽と中傷、独善と偏狭——これらの冷い心理的葛藤の渦巻く現実、たしかにラッセルの指摘する全世界的・全人類的な impartial な感情の生誕を、又そういう意味での彼の所謂「智慧」の生誕を、我々現代人に強く要求しているといいうるのではなからうか。

従つて、そういう意味では、更に稿をあらためて、この問題を主題として論ずることの、喫緊事たることを深く感ずるものである。

参 考 文 献

- B. RUSSELL : The Listener, No. 1332, p. 390 (1954)
 —— Sceptical Essays, London, (1929)
 —— The Impact of Science on Society, London, (1952)
 其他ラッセルの諸著作。